毎日新聞

2014年（平成26年）6月30日（月）

「富士山の光と影」出版

渡辺豊博・都留文科大教授

山麓の産廃、洞窟の落書き……

問題指摘、登山者制限訴え

富士山の世界文化遺産登録1年を迎える中、富士山クラブ元事務局長で都留文科大教授、グラウンドワーク三島専務理事の渡辺豊博さん（64）が「富士山の光と影」（清流出版）を出版した。富士山の問題点を明らかにし、解決策を提言した。【石川宏】

山麓（ふもと）の産業廃棄物の山、洞窟の中の落書き、垂れ流されたトイレットペーパー。掲載した64枚のカラー写真が〝光と影〟を雄弁に物語る。「現場や影の部分を知らないまま、富士山がきれいと思い込んでいる人が多い。問題点を可視化するため分かりやすく正確に伝えることを心がけた」と渡辺さんは話す。

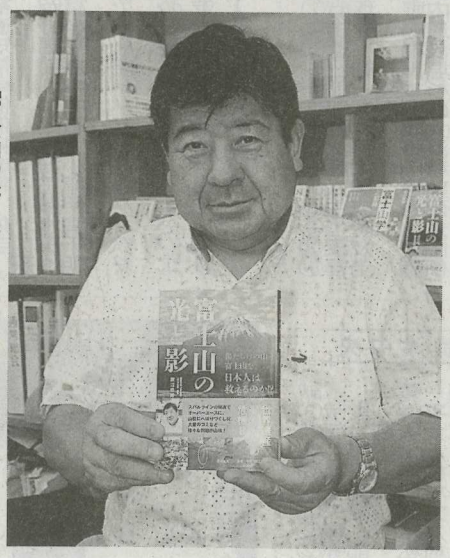
世界遺産として評価されたのは、信仰や景観という富士山の普遍的価値が認められたから。「だから開発の抑止や利活用の制限が求められている。しかし現状は逆。一層の利活用を目指し、富士山を冒とくしている」と苦言を呈する。

渡辺さんが提言するのは登山者の制限と、登頂以外の観光だ。

2008年以前、登山者は年間18万～25万人だったが、世界遺産熱などで昨年は約31万人だった。山小屋の収容能力、バイオトイレの処理能力、登山の安全性などを考慮すると、現在の登山者数は多すぎると指摘する。「観光業者は以前の水準でも生活できた。期間内や1日の上限を定めたうえで、登山届提出を義務づけることで制限は可能」と提案する。

そして「ご来光目当ての登頂に観光が偏りすぎている。富士山山麓には原生林がある。秋の紅葉、春の新緑、冬のトレッキングなどで富士山の自然をもっと実感してほしい」と訴える。

四六判、197ページ。1600円（税抜き）。



「富士山の光と影」を出版した渡辺豊博さん